

販路拡大・海外進出の きっかけに

国内の竹林で約7割を占める孟宗竹。繁殖力が強く、生態系をも変えかねない。孟宗竹の有効活用を研究し、天然由来の消毒剤や食品添加物を製品化する大阪府吹田市の(株)タケックス・ラボ。岡田久幸社長が独立法人中小企業基盤整備機構近畿本部(以下、中小機構近畿)の制度を活用した国内での販路拡大やASEAN(東南アジア諸国連合)への進出計画を語った。



「新連携事業」で 連携体を組織し販路拡大

竹細工の家庭に生まれ、竹の不思議な力に気付いていました。高校時代、2年半の入院中にアレルギーで苦しむ子供の姿を見て、竹の特性を生かして「地球環境保全と人の健康」に貢献したいと思いました。当初は独学で、抗菌性や食品添加物の利用を研究していましたが、限界がありました。その折、北里大学に協力いただき、孟宗竹の表皮の成分は抗菌性や抗ウイルスに有用と確認できました。

その後、他の大学でも研究を進め、食品添加物の認可を得ました。ただ、食品添加物には安定供給や危機管理などでのハードルが高く、大学の研究だけでは大手食品企業との取引は難しいものがありました。

その時、出会ったのが平成19年度に中小機構近畿が募集していた「新連携事業」です。当社がコア企業となり、製造・販売の伏見製薬所と製造の信和アルコール産業、販売・販路開拓の住友商事とで連携体を組織し、



株式会社タケックス・ラボ
代表取締役 社長
岡田 久幸 氏

計画策定を持つ商社の開拓が必要と指摘されました。計画策定がなければ、「夢と連携体だけで完璧」と思い込み、竹資源活用の事業は成功していなかったと思います。さらに、新連携に採択された直後、ノロウイルス事件や新型インフルエンザが流行し、消毒剤や食品添加物は注目を集め、業績も伸ばすことができました。

その後、消毒剤や食品添加物の国内市場は価格競争が激化し、海外進出を検討し始めた頃、中小機構の支援で香港の展示会に出展できました。そこで現地のパートナー企

業に出会い取引も始まりました。これをきっかけに独自にタイ、マレーシア、シンガポールで市場調査を始めました。

同制度の大きな利点は、計画策定する上で、課題を顕在化させて、いかに克服するかを考える機会を与えてくれたことです。特に販路では、全国の中小の食品企

業に出会い取引も始まりました。これをきっかけに独自にタイ、マレーシア、シンガポールで市場調査を始めました。

業に出会い取引も始まりました。これをきっかけに独自にタイ、マレーシア、シンガポールで市場調査を始めました。

中小機構のネットワークで ASEAN進出

その経験を踏まえASEAN進出のため、平成25年度の中小機構近畿のF/S(海外進出のための事業化可能調査)に申請、採択していただきました。F/Sには中小機構の専門家が同行され、販売パートナー候補の調査やエンドユーザーの市場性、現地販売での許認可制度や宗教上の制約などの調査を行いました。専門家からは各国の歴史や政治情勢などが学べました。さらに、自社だけではコンタクトできない企業に訪問でき、中小機構のネットワーク力や助言に感謝しています。

竹の有効利用は表皮の抽出成分だけではありません。竹の本体を使った建材の開発も行っています。繁殖力の強い竹を伐採・利用するコンサル事業も京都府の宮津、熊本、鹿児島で始めています。この事業は、わが国が進める「地方創生」にもなると考えています。